この可愛いい孫達に再びあのような悲惨な目には逢わせ 労苦が続く……。今は娘三人も嫁ぎ、男の児ばかり五人 である。もう二度と再び戦争は起こしてはならないし、 の孫に囲まれて幸福な生活に溺れ切っているような今日

世を去って五年になる。当時十七歳の私も還暦も過ぎ

たくない。さんざん苦労した母も九十四歳を一期にこの

た。

引揚げ、密航船

北海道 和 泉 春 豊

私達は、昭和二年樺太大泊郡知床村弥満に漁業を営む

ため渡棒した。

四年には弥満に定住を決め一家五人は岩内を後にした。 当初二年間は春から夏にかけ基礎を築き、その後昭和

それから十八年もの間、家族が力を合わせ鰊、鱒、昆

着々と基盤を作り財産を増やしていった。 布を取り、 開拓の苦労は目にあまるものがあったが、

> 人前に成長し、一段落した時のこと。終戦により樺太に 昭和二十年八月十五日、終戦。ようやく子供たちも一

残るべきか否か決断をする時がきた。

地区の方、役場の方々とも相談した結果、私達は一時

引揚げることになった。

しかし、引き揚げるのも容易ではない。引き揚げ船を

は航海は無理、かといって動力船があるわけでもない。 船を選ばざるを得なかった。また、密航船も無動力船で 待つか、密航船を待つか悩み、結局こんな田舎では密航

待った。また、中には手漕ぎの和船で出た人もいたが、 的になり、隣から隣へと次々に荷物をまとめ、密航船を 駐、真岡で激戦中との報せがはいり、益々密航船が決定

そうこう悩んでいるうちに、大泊にソ連兵が上陸進

に着いたものか、もしくは遭難してしまったのか……気 霧と波のため引き返す人、帰らない人、はたして北海道

月初めに北海道から十屯から十二屯の船が迎えに来てく 持ちがめいることばかりだった。 そのうち、二百十日になり無動力船の密航は無理、九

れた。が、誰もが早くこの地から引き揚げたいという気 227

持ちで、順番を決めるのにも苦労した。

いため私達は結局九月十一日にようやく船を見つけるこすることに決まったが、やはり限られた人数しか乗れな女、子供は動力船に、男は和船に乗り動力船に引き船

度に失うということは、腹を切れと言われた思いだっこの時、二十年間苦労を重ね築き上げた生活の場を一

なった。

たちが泣き叫ばす頑張ってくれたことが皆の励ましに

とができた。

遭遇。明かりを消し停船、探照灯で照らした。その間皆無事出航したかに思えたが、一時間後にソ連の監視艇に長男が後の船となり、一家は乗船した。船は夜を待ち

り、また全速で走る。監視艇がくる。停船……り、また全速で走る。監視艇がくる。停船……一言の言葉も出ない。一時間ほどでソ連の監視艇は去

が見える。その船を引船している動力船の船足は遅くな海峡半ば頃、白々と夜が明け、和船で密航している船場合遠廻りをしても仕方無いとのことだ。

:。

る。見える人だけを引いた船に移し船は捨てる。波が高

乗換も限度と船長は判断した。船を見る船長は泣い

人も泣いている。

山々が見え隠れする。誰も一睡もしていない。幸い子供に、鬼志別か稚内にする。」と言う。波間から北海道の長が、「枝幸沖だがこの風では枝幸港は無理だ。進路を西かすかに北海道の山々が見えた。皆泣いて喜んだ。船

た。年輩者が船長に何やら相談をしているようだ。この入れるという。皆は無言で浮きになるものを選び始め行くことにする。船長はそこも駄目なら砂浜を選び乗り鬼志別に来たが、やはり波があって近寄れず、稚内へ

船はもう北海道の目の前まで来ているというのに…風ではもう少し岡寄りを走ることになる。

る。引かれた船の者は水さえ持っていない。るほかない。船長に持ってきたにぎり飯を渡す者もい気は焦る。が、ここは船長と二、三人の年輩者に任せ

山が見えてから五時間もたった頃、いくらか波が楽に、弓カオた船の者に力さえ持ってしたし

ている。乗っている皆も泣いている。見捨てられた船の

た頃、大岬燈台が見えてきた。引かれた船の者も万歳をた。皆一安心し、船長の顔にも笑いが洩れるようになっで少し沖を走ってみると言う。波は以外と静かになっなったような気がした。船長は、この先は浅瀬があるの

母親がいる。皆腹をすかしているのに気付き、にぎり飯ている。 「助かったんだよ。」と、子供の頭を撫でている皆、誰に言うともなく 「有り難う、有り難う。」と言っ

して船長の苦労に応えている。

を分けあって食べている。

達の幸運さと遭難者のあわれさとで皆涙が止まらなかっと、方々で密航船が遭難にあったことなど聞かされ、私話によれば、ある引き揚げ船が留萌沖で撃沈されたこと、弥満方面の定期船の船長に会った。船長から聞いたと、弥満方面の定期船の船長に会った。船長から聞いたと、弥満方面の定期船の船長に会った。船長から聞いたられていたので、皆足がしびれている様子ですぐには岡られていたので、皆足がしびれている様子ですぐには岡られていたので、皆足がしばれている様子ですぐには岡られていたので、皆足がしばいた。狭いところに閉じ込め

とを誓い合い大恵丸の船長に有り難う、とは言葉では言くれぞれの行き先を話し合い、健康でまた再会するこ

た。

り、これからの苦労を胸に秘め個々の行き先に向かっい表すことが出来ないほど感謝の気持ちを込めて見送

た。

樺太から砂川へ

北海道 日浦トミ

らの樺太が本当の戦場になりました。に暮らしておりました。その後男の子三人に恵まれ平和の日浦家に嫁ぎました。しかし昭和二十年に私達一家の生活も戦争のため一変しました。八月十五日終戦のラジ生活も戦争のため一変しました。八月十五日終戦のラジなは、昭和七年真岡より十キロ離れた広地郡、天茂泊

と逃げ廻っているうちに主人と父がいないのにびっくり浜辺を歩いたり、近くの山の中へはいったり、大勢の人二歳になる父を背負いたくさんの人と共に逃げました。校四年生、一年生、一歳の乳呑み児をつれ、主人は八十校四年生、一年生、一歳の乳呑み児をつれ、主人は八十校四年生、一年生、一歳の乳呑み児をつれ、主人は八十